

## 今号の表紙

### 表表紙

Helen Pynor *"Poisonous sores"* (部分)

2007, C-type photograph on Duratran, face-mounted on glass

173 cm x 39cm, Edition of 5 + 1AP

Courtesy the artist, dianne tanzer gallery + projects, Melbourne and DOMINIK MERSCH GALLERY, Sydney

### 裏表紙

Helen Pynor *"Liquid ground 3"*

2010, C-type photographic print face-mounted on glass

160 cm x 110 cm / 100 cm x 68 cm

Edition of 5 + 1AP / Edition of 5 + 1AP

Courtesy the artist, DOMINIK MERSCH GALLERY, Sydney and GV Art, London

### 作者のことは

Helen Pynor

*"Poisonous sores"* (表表紙)

この作品の上部には、社会文化史研究によって明らかになったイギリス/ケルト、オーストラリアの伝統的な家庭薬のレシピの一つが記載されている。そのレシピは、作品の中心にある心臓に物理的に溶け込むようになっている。このようにして、この作品は心臓の物質的な触感や存在感、(現在で言うところの)感染症などによる身体的な痛み(かつて"poisonous sores"と呼ばれていた)の癒し、そして西洋では伝統的に情動や生命の象徴とされている心臓自体の癒しがメタフォリカルに対話しているような空間を構成している。心臓が、周期的なリズムを生み出し、生命の持続に欠かせない臓器であることは言うまでもない。この作品では、心臓の打つリズムのように、過去と現在、文化と生物学が(どちらかが支配的になることなく)永続的に対話しているのである。

この作品は、もともと"red sea blue water"と題された一連のシリーズの一環として制作されたものだ。その過程で私が視覚的あるいは技術的なツールを援用しながら試みたのは、物体としての人体が、思想、文化的実践、社会的・歴史的な物語性の中でどのように相互に関連付けられ、複雑に絡み合ってきたのかを浮かび上がらせる、ということだ。

*"Liquid ground 3"* (裏表紙)

*"Liquid Ground"* シリーズは、解剖学にはよく知られている身体の内部を、西洋医学のようにニュートラルに記述するのでも、恐怖を煽りたてるのでもない形で、なにか言葉を探すように描き出す試みである。この*"Liquid ground 3"*の制作には本物の腸を使っているが、創作上さまざまな画像の加工をすることで、解剖学的記述からの逸脱や、背後にある両義的な雰囲気を増幅させている。

ここでの私の試みは、身体性にまつわる歴史的あるいは文化的な物語性を今一度捉えなおし、普段隠されている自分の身体の内部を「人格化」することである。この一連の作品では、一般的にはぞっとするような印象を持たれうる臓器が衣類と深い水の間でシームレスに浮遊している。

このプロジェクトを開始した2009-2010年の間、私はロンドンで暮らし、制作を行っており、その際テムズ川で頻発する入水事故について色々調べていたことがひとつのきっかけとなった。しかし、実際の作品で私が取り組んだのは、そういった個別の事象ではなく、文化と生物学身体を巡る、もっと広い意味で複雑な様相についてである。

Helen Pynor

オーストラリアとロンドンを拠点とする現代美術作家。シドニーのマッカーリー大学で生物学を勉強したのち、シドニー大学の美術学部を卒業(写真、インスタレーション)、芸術学の学位を持つ。身体を巡る生物学、文化史、思想史、医学史に強い関心を持ち、臓器をテーマにした美術作品を多数発表している。科学者や医学研究者とのコラボレーションも多く、気鋭の Biomedica/Biological Artist として注目を集めている。

<http://www.helenpynor.com>

